

感性を育む和学講座第24回

～お正月の閉めから節分 やまと言葉神話・古事記冒頭部分～

鏡開きから節分

1月11日は「鏡開き」です。

お鏡を下げていただく日ですね。お鏡は神様のパワーが宿っているので、頂いてください。

元々は1月20日が鏡開きでしたが、江戸時代の三代将軍徳川家光の命日が4月20日となり、月命日の20日におめでたいことは避けるようになり、商人の蔵開きだった1月11日になったと云われています。

鏡餅をいれたおぜんざいなどをたいたりします。ぜんざいの小豆が厄払いになるのです。



1月11日に鏡開き、15日は関西で小正月、女正月とも云われています。そして、1月15日には各神社やお寺で「とんど焼き」が催されます。

「左義長」と云われる行事です。

元旦、旧暦の新月(朔)から始まるお正月行事は、旧暦だと満月(望)の十五日である

小正月で一区切りがつきます。

平成十一年までは小正月に元服の儀が行われていたことに因んで、一月十五日が成人の日でもありました。



節分

新暦ではお正月と立春までは一ヶ月ほど期間がありますが、旧暦では立春に近い新月の日が元日でしたので、立春の前日である節分に近い日となります。

令和4年は2月1日が、旧暦の1月1日です。ゆえに節分を「年越し」とも呼ばれます。

立春からがまことの新年という見方も納得がいきます。

立春の前日が節分。節分には鬼が出るということから、豆まきなどの行事が各地で行われます。豆をまくことになったのは室町時代からだそうです。まめに(元気に)暮らせるようにという願いを込めて、年齢分の豆を食べたりもします。

この豆は火を通した豆でないといけません。火を通すということで、冬に勝つという意味と、鬼がもっている金棒を火で溶かすと考えられるからです。

豆は柀に入れます。「益々繁盛するように」という語呂の考えと、陰陽道では柀は木で

できており、木と木で火が起こり金棒を溶かすという発想です。
また、豆は「摩滅」に通じます。そして、撒くというのは農耕の種を撒くと同じです。
種をまくと芽が出て、新しい生命が生まれます。豆をまくことで邪気を祓い、新しい生命が生まれる新春を迎えることができる、要は種をまくのと同じ意味合いを込めていたのではないのでしょうか。



豆を撒かれる鬼ですが、まことの鬼、邪気や悪いものは目に見えないものであり、それを追い払う**方相氏**が現れていたのですが、方相氏の姿が異形であったため、後に鬼の代わりに追い払われることになります。



さて、節分の行事として今や全国的になった「巻きずしの丸かぶり」があります。この巻きずしを「恵方巻」と名付けられ、節分の日にはデパート、スーパー、コンビニで大々的に売り出されています。

巻きずしをその年の恵方を向いて丸かぶりして食べると、願い事が叶うと言い伝えられている習慣です。大阪が発祥のようですが、起源は様々な説があります。いろいろな説をたどると、花街では大正時代から行われていたようです。



年の初めに話題になる「恵方」ですが、女神である歳徳神が鎮座する方位のことを指しています。万事吉という大吉方位で、この方位で物事を執り行えば何事も良い結果になると信じられていたのです。

恵方はその年の十干によって決められます。

癸卯の今年(令和5年)の恵方は南南東です。

歳徳神が宿る吉方位と正反対の方位に位置するのが、金神と云われ戦争や災害を司る神様です。金神が留まる方位は金の精が重なるため、人の心も冷酷になり時代によっては鬼門より嫌われました。この方位に向かって旅行や移転、嫁取りなどを行うことは禁忌とされていたのです。これを犯せば「金神七殺」といって家族七人の命が絶えると恐れられました。

金神が鎮座する方位もその年の十干によって決められます。

- 甲・己の年は午・未・申・酉の四方位
- 乙・庚の年は辰・巳の二方位
- 丙・辛の年は子・丑・寅・卯・午・未の六方位
- 丁・壬の年は寅・卯・辰・巳の四方位
- 戊・癸の年は子・丑・申・酉の四方位

金神は時々鎮座する方位から出ることがあり、その期間は災難がなくなると考えられていました。

今の時代にも私たちに馴染みのある凶方位といえば「鬼門」です。陰陽道では東北(丑寅の方角)を鬼門と呼びます。古代中国では死者の霊を鬼神としており、鬼門は死者が出入りする門という意味にもなります。

平安京に遷都した桓武天皇は、都の鬼門に当たる丑寅の方角に延暦寺を建立し、国家鎮護の場としました。江戸幕府もそれを真似て、丑寅方位の鬼門に上野寛永寺を建立しています。

また、江戸城の外堀の堤防上には、以前は松の木が多く植えられていましたが、鬼門の方角には柳が植えられており、その付近を柳原と呼んでいました。柳原には古着屋が多くありました。着物を江戸弁では「キモン」と発音するので、鬼門で着物を売ると繁盛すると考えたのでしょう。

さて、節分お化けをご存じですか。これは人間が化けているのです。季節の変わり目には、秩序が乱れるため邪鬼なども異世界からやってくると考えられており、普段とは違う姿(老婆が若い娘のようにおさげ髪にしたり、娘が成人女性のように島田を結ったりした)になり、鬼をやり過ごして神社にお参りしました。まるでハロウィンみたいです。

京都で節分と言えば、吉田神社が有名ですが、須賀神社も興味深いです。節分の時だけ、須賀神社では梅の枝に括って「懸想文」を売り歩く人が登場します。その姿は烏帽子・水干(すいかん)に白い布で顔を隠しています。

